

[第四回日本言語文化学会発表要旨]

中国帰国者への日本語指導試行の報告
-発音と構文の指導を中心に-

保坂 律子

(1992.6.13発表)

1. はじめに

報告者は平成3年度の一年間、都立高校で中国帰国者の生徒に週1回国語の取り出し授業を担当した。対象の生徒は、日常会話には不自由はないが一般生徒と同じ授業にはついていけない中国帰国者の高校3年生2名⁽¹⁾であった。取り出し授業は週1回2時間と時間が限られていたため、指導は発音と構文に重点を置いた。また生徒の日本語は中国語の干渉を受けていたため、中国語と日本語の音韻および文法の相違を説明し、理解の助けとした。本稿では指導の概要と、その結果について述べる。

2. 中国帰国者の日本語の特徴と中国語

彼らの日本語の特徴と干渉を受けていると思われる中国語の特徴をあげる。

(1) 発音

- 促音の発音ができない : 中国語⁽²⁾には促音がない
- 長音の発音ができない : 中国語は漢字一字が一音節
- 清音、濁音の区別ができない : 中国語は有気と無気の対立
- 高低アクセントは比較的正確 : 中国語にはすべての漢字に声調がある

(2) 構文

「の」の多用 : 中国語の構造助詞で、体言修飾の働きをもつ“的”をすべて機械的に「の」に置き換えてしまう。

助詞の無い文をつくる : 中国語は語順が格を決める。

3. 指導方法とポイント

(1) 発音

1) 次の点について説明、あるいは指導した。

- ①促音と長音 ・手を叩きながら発音、日本語の「拍」の概念を使って指導
- ・日本語は漢字一字でなく、かな一字がどれもほぼ同じ長さ

②清音と濁音 ・中国語には「有気音と無気音」の対立が存在するが日本語では「無声音と有声音」が対立する。

2) 聞き取り練習

1) と平行して①促音と長音(キッタとキータ), ②清音と濁音(カとガ)などの聞き取り練習を授業の度に毎回行った。

ポイント

聞き取り練習が効果的—聞き分けられると言い分けられるようになる

(2) 構文

1) 「の」の多用

生徒に書かせた簡単な作文の中から例を集め、

①機械的に“的” = 「の」と考えるのは間違いであることを例を挙げて説明。

(例) 有名的電視機 ≠ 「有名のテレビ」

修飾語が名詞の場合に限り、中国語の“的” = 日本語の「の」が成立

(例) 我的衣服 = 私の服

②中国語の“的”の働き

代表的働きにつき、日本語ではどうなるか説明し「の」の理解の助けとした。

ア 修飾語が名詞の場合 “的” = 日本語の「の」に相当

我的書(私の本)

イ 修飾語が形容詞

単音節形容詞 + “的” = 日本語の形容詞に相当・直接体言を修飾する
(“白的花” = 白い花)

多音節形容詞 + “的” = 日本語の形容動詞に相当

連体形「～な」の形で修飾する

(“幸福的家庭” = 幸福な家庭)

ウ 動詞・動詞フレーズ + “的” = “的”が体言修飾の標識・

言い切りの形 + 被修飾語

(“買的书” = 買った本, “喝酒的人” = 酒を飲む人)

ポイント

中国語の“的” → 日本語の「の」ではない場合が多い、と教える

2) 助詞のない文をつくる

- ① 中国語の“我”は語順の助けを借りて、「私は」の意味も「私を」の意味も表すことができる。中国語では語順が格を決めるが、日本語は助詞を用いなければならぬことを説明し、主語と目的語の区別を指導した。

私は 字を 書く

我 写 字 我=私は

彼は 私を 愛す

他 愛 我 我=私を

- ②助詞の大切さの理解を促す。

助詞の違いは意味の大きな違いにつながることを例をあげ説明し、理解させるように努めた。

<例> 私(が)彼(を)愛すること

私(を)彼(が)愛すること

ポイント

日本語では主語、目的語のあとに必ず助詞が必要。

“我”が動詞の目的語の位置にあれば「私を」，“我”が主語なら(条件により)「私は」あるいは「私が」となる。

4. 指導の結果と考察

(1) 発音

聞き取り練習の誤答率⁽³⁾は、4月当初は誤答率約50%、9月末は約30%、学年末の1月には20%弱となった。この誤答率に反比例して、生徒の発音はよくなっていった。すなわち聞き分ける能力と、言い分ける能力は比例するという結果になった。これは発音練習には聞き取り練習も欠かせないことを意味する。

(2) 構文

当初多用していた日本語の「の」も、作文では徐々にではあるが減っていった。しかし、会話ではしばしば「眼鏡をかけるのひと」、「悪いの性格の人」のように、中国語の“的”を日本語の「の」に置き換えただけの文を作った。作文のように文字に直す作業の必要がない分、会話では“的”の用法を吟味する過程が省略されがちなのかもしれない。

助詞に関心を持つようになった結果、主語のあとの助詞「は」と目的語のあとの格助詞「を」は正しく使えるようになったが、二重目的語文で「に」と「を」が同一文中に存在する場合の使い分けまでには到らなかった。これも中国語では（二重目的語文も）助詞によらず語順によって（直接・間接）目的語が明らかになることの影響があると考えられる。

5. むすび

本稿では、中国帰国者への日本語の発音と構文指導の試行結果を報告した。学習効率をあげるため、まず、生徒の日本語が中国語の干渉を受けていることに着目し、両言語の音韻・文法の相違を理解させた。つぎに、発音指導において、中国語にない音の聞き取り練習に力を入れた。この結果、授業時間が少なかつたにも拘らず、発音面では数字で見える形で効果が表れた。構文に関しては、会話能力での成果は表れなかったが、作文能力は向上し、助詞の大切さも理解させることができた。

言葉の上達には、できるだけ多く話し聴くことが大切であるが、指導した高校では、中国帰国者と他の日本人生徒の交流は少なく、彼らが日本語を話したり聴いたりする機会が少なかった。他校でも同様の状況にあると聞いている。これが、中国帰国者が日本語を修得する上で大きな障害になっていると思われる。今後、中国帰国者への日本語指導では、授業以外の場での日本語と接する機会を増やすことが必要であると思われる。

<注>

- (1) 聞き取り練習は2名のほかに、他の3年生の中国帰国者生徒にも行った。これは生徒が聞き取り練習を希望したことによる。発音面での特徴は取り出し授業の生徒だけでなく、全員に共通するものであった。指導結果にあげた誤答率は、計10名の生徒に行った結果である。
- (2) ここでいう中国語とは普通話と言われる共通語（標準語）を指す。
- (3) 聞き取り練習のテスト問題は、促音と長音、無声音と有声音の語彙を含む短文のグループ（またはペア）のうち、聞き取った短文番号にマルをつけさせる形式をとり、全15問。（例：ア.それはキカイが悪い イ.それはギカイが悪い）

（お茶大中国文学専攻修士2年）